

## 韓国の著名漫画家ホ・ヨンマン画伯「九州新幹線の旅」 ～韓国の取材団が感じた九州4市の魅力～

ソウル事務所

クリアソウル事務所では、韓国の著名漫画家ホ・ヨンマン画伯を日本に招致し、日本各地の食や自然、伝統文化など、各地域の魅力を韓国に向けて発信する事業を行っています。

今回は、2013年7月10日（水）～14日（日）の日程で実施した九州4市（鹿児島市、熊本市、北九州市、福岡市）での取材の様子を紹介します。

### 1 九州新幹線の旅

今回行った「九州新幹線の旅」の実施主体は、鹿児島市、熊本市、北九州市、福岡市の4市で構成される「九州縦断観光ルート協議会」である。

本協議会は、「九州縦断ルートを広域観光ルートとして整備するため、観光資源の開発整備を図り、併せて国際観光ルートとして国内、国外観光客の誘致活動を促進し、観光産業の振興に寄与すること」を目的とする組織である。

鹿児島市、熊本市、北九州市、福岡市の4市は、「九州新幹線鹿児島ルート」により、移動が短時間で容易に行えることから、今回の取材は、鹿児島から福岡方面に新幹線で北上していく「九州新幹線の旅」として、実施することとなった。

以下では、各市の様々な取材先の中で、特に印象的であった取材先・出来事をピックアップして取りあげることとしたい。

### 2 驚きの連続、桜島。取材団を驚かせたその理由は？（鹿児島市）

桜島、それは日本人であれば誰もが知る鹿児島のシンボルである。

日本に到着し、鹿児島黒豚のしゃぶしゃぶに舌鼓を打った後、取材団は、真っ直ぐ、その地へ向かった。

桜島では、NPO法人桜島ミュージアムの方が、案内人として出迎えてくれた。取材団の誰もが、年配の案内人を想像していたが・・・、登場したのは26歳の青年。その年齢に驚きの声があがった（1回目の驚き）。

この青年、大学卒業後、桜島を愛して移住したとのことで、海千山千の取材団の質問にも、そつなく対応。その軽快な動きと、はきはきとした話しぶりには、桜島愛が確かに感じられた。

その後は、案内人同行の元、桜島を満喫して時間を過ごしたが、案内人や随行していた鹿児島市職員が桜島に住んでいること（2回目の驚き）、海辺の砂浜を少し掘るだけで温泉がわき出てくること（3回目の驚き）、一定規模以上の噴火等が全て計測されていることや、日々噴火活動が起こっていること（4回目の驚き）等に、ホ・ヨンマン画伯を始めとする

取材団からは、次々と驚きと感嘆の声があがっていた。

鹿児島市は、現在、桜島・錦江湾について、日本ジオパーク及び世界ジオパークの認定に向けて取組を進めており、2013年4月に桜島・錦江湾ジオパーク推進協議会を発足している。桜島を愛する多くの人々によって、今後、どのように取組が進められていくか、要注目である。



海辺での足湯を満喫する木画伯



桜島をスケッチする木画伯

### 3 人々に癒しを与えるのは「くまモン」だけではなかった。世界中を旅してきた取材団が絶賛したその場所とは？（熊本市）

熊本と聞いて、最初に思い浮かぶのは、熊本城、阿蘇山、熊本ラーメン、そして最近であれば、くまモンであろうか？しかし、今回、取材団が最も絶賛した取材先は、そのどれでもなかった。

その取材地は、熊本市中心部から車で北へ約1時間の場所にある「植木温泉」という静かでゆったりとした時間の流れる温泉街。

旅館に到着するや、その醸し出す風情に、取材団から絶賛の声が次々とあがる。特に、女性陣は、目を輝かせて、取材の疲れも吹き飛んだかのような表情を見せながら、写真撮影を行っていた。次の日の朝、温泉に浸かって疲労が抜けた取材団全員が、満足げな顔をしていたことは言うまでもない。

ちなみに、温泉旅館のあまりの人気ぶりに、筆者が、ソウル事務所の現地スタッフと交わした会話は以下のとおり。

筆者「韓国の人たちって、やっぱり旅館とか、温泉が大好きなんだね。」

現地スタッフ「韓国には、基本的には、日本のような本格的な温泉はないですからね。」

旅館も、日本ならではの風情があって素敵ですし。」

筆者「立派なシティホテルとかは、こっちが期待しているほどには感動してくれないよね？」

現地スタッフ「現代的なホテルなら韓国にもたくさんありますからね。西洋風の近代的なホテルならまた別かとは思いますが・・・でも、やっぱり、「日本の旅



をしたぞ！」という気になるのは旅館でしょう。温泉旅館が最強だと思います」

韓国人観光客おもてなしの際の、一つの参考にして頂ければ幸いです。



植木温泉 旅館「ややの湯」



旅館独特の風情に、取材団も大満足

#### 4 漫画家 meets メーテル。「モノづくりのまち」北九州市（北九州市）

戦後、日本は、高度経済成長期を経て、モノづくりの国として、世界から高い評価を受けるに至った。その「モノづくり」に関して、代表的な都市の一つが北九州市である。

北九州市では、市内の多くの「モノづくり」企業の協力の下、産業の実態を目で確かめられる「産業観光システム」が構築されており、今回は、TOTO工場の見学、工場夜景ツアーといった「モノづくりのまち」であることを実感できる取材を行うことができた。

また、北九州市は多くの漫画家を輩出している。漫画も、広い意味での「モノづくり」である。今回、北九州市に「漫画ミュージアム」なるものがあることを知った取材団は、工場見学等と併せて、この地を取材先の一つとして選択した。

漫画家であるホ・ヨンマン画伯は、案内人の説明を聞きながら、日本の漫画家たちの作品を真剣な表情で見つめていた。現在も精力的な執筆活動を行っている画伯に、大きな刺激を与えたであろう取材だった。



偶然に(?)置かれていた「食客」単行本



自らの作品「食客」に目を通すホ画伯



銀河鉄道999メーテルと記念撮影



漫画ミュージアムに贈られたサイン

## 5 熱気と迫力。これが日本の祭りだ！取材団が夢中でシャッターを切った博多祇園山笠祭り（福岡市）

「日本の祭りを取材させてくれないか？」

今回の取材に関し、取材団と打ち合わせした際の第一声である。

「ただでさえ大変な祭りへの対応の中で、海外からの取材を受け入れてくれるだろうか」そのような一抹の不安を感じながら、九州縦断観光ルート協議会に相談したところ、福岡市観光コンベンション部の協力によって、博多祇園山笠祭りの取材が実現するに至った。

時は、2013年7月13日（土）、この日行われる「集団山見せ」を見るべく、福岡市庁内で待機していた取材団は、福岡市担当者の素早く、かつ的確な判断の下、見物客の群れを掻き分けながら、「集団山見せ」の迫力ある写真の撮影を行った。

福岡市内を、次から次に勇壮に駆け抜けていく山笠と、その参加者たち。男衆の威勢のいい掛け声。子供たちの元気な笑顔。勢いよくまかれる水。ほとばしる汗と熱気。その全てが、取材団の心を捉え、離さなかった。

帰りの飛行機内で行った取材団へのアンケートでも、取材団全員が「非常に満足」と回答しており、日本の祭りPRに大きく繋がるであろう取材となった。

なお、その迫力ある祭りの様子は、以下の公式サイト等でご確認いただきたい（祭りの人ごみの中、取材団の誘導に必死だった筆者は、写真をほとんど撮ることができなかったため・・・）。

（博多祇園山笠公式サイト）

<http://www.hakatayamakasa.com/index.php>





祭りを楽しむ子供たち



祭りの様子を眺める木画伯

## 6 最後に

今回の九州取材は、アジアナ航空の機内誌「ASIANA」の9月号に掲載されているほか、2014年夏頃に単行本としても出版が予定されています。

魅力ある取材先の数々が、どのように紹介されるのか、担当者としても大いに楽しみにしているところです。

(見野所長補佐 札幌市派遣)

